

メッセージアウトライン ヨシュア記9:1～27 「生死を分ける誓い」

カナンの地のエリコの町はヨルダン川を渡って来た指導者ヨシュアの率いるイスラエル軍によって滅ぼされ、続いてアイの町はイスラエル軍が町の後ろに伏兵を置くという作戦によって滅ぼされた。これらはすべてイスラエルの主なる神が彼らとともにいてくださり、助け導き、力を与えてくださったゆえであった。

[1-2]「さて、ヨルダン川の西側の山地、シェフェラ、レバノンに至る大海の全沿岸のヒッタイト人、アモリ人、カナン人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人の王たちはみな、これを聞くと、ともに集まり、一つになってヨシュアおよびイスラエルと戦おうとした」

「シェフェラ」のもとの意味は「低い」で山地と地中海沿岸の中間地帯を指す。「レバノンに至る大海の全沿岸」の「大海」とは地中海のことであり、つまり北のレバノンにかけての地中海沿岸部のことを指す。カナンの地に住む民族のリストは3:10節にあげられている民族と同じであるが「ギルガシ人」だけ含まれていない。彼らはエリコとアイの町がイスラエルによって滅ぼされたことを聞いて、皆集まって連合軍を形成してイスラエルと戦おうとしたのである。

[3-5]「ギブオン」…アイより大きな町であり、アイの西南約10キロメートルの地点にあった。

ギブオンの住民たちはヨシュアがエリコとアイに対して行ったことを聞くと、対イスラエル連合軍には参加せず、彼らもまた策略をめぐらしてなんとか生き延びようと考えた。彼らは少数の代表者を立て、古びた袋、古びて破れて継ぎ当てをしたぶどう酒の皮袋、繕った古い履き物、古びた上着を身に着けた。彼らの食料のパンは乾いてぼろぼろのものを入れ、いかにも時間が経過したように見せかけた。

[6]「彼らはギルガルの陣営のヨシュアのところに来て、彼とイスラエルの人々に言った。『私たちは遠い国から参りました。ですから今、私たちと盟約を結んでください。』」

ギルガルはヨルダン川を渡って最初に宿営したところである。イスラエルはエリコとアイを滅ぼして後、引き返して来てそこに陣営を置き、次の攻撃の準備をしていたのである。

ギブオンから来た者たちは自分たちが遠い国から来た者でカナンの地の住民ではないように見せかけ、自分たちと盟約を結んでくださいと願う。

「盟約」とはこの場合、滅ぼさない、全滅させないという約束であり、誓いである。この誓いは神の前に誓うものであり、いったん結ばれたらそれを破ることはできない。

[7] この申し出を聞いてイスラエル人たちは疑った。

「ヒビ人」…ギブオンの人々は人種的にはヒビ人であったのであろう。カナンの地の

住民たちは人種的にはノアの三人の息子セム、ハム、ヤフェテのうちハムの子カナンの子孫である。→創世記10章 イスラエル人は「どうして私たちがあなたがたと盟約を結べるだろうか」と拒否する。

[8] しかし彼らは「私たちは、あなたのしもべです」とヨシュアに身を低くして従順の意を示す。

「あなたがたは何者か。どこから来たのか」とヨシュアはなおも彼らを詰問する。イスラエル人はカナンの全住民を滅ぼすように主によって命じられていたので、和解することはできない。→申命記7:1-2 それゆえ偽りは許さないという厳しい姿勢でヨシュアは彼らに対しているのである。

[9-10]「彼らは彼に言った。『しもべどもは、あなたの神、主の名のゆえにとても遠い国から参りました。主のうわさ、および主がエジプトで行われたすべてのこと、主がヨルダンの川向うのアモリ人の二人の王、ヘシュボンの王シホン、およびアシュタロテにいたバシャンの王オグになさった、すべてのことを聞いたからです。』」

彼らはイスラエルのエジプト脱出の時に、イスラエルの主なる神がエジプトでなされた十の災いを始めとするすべてのこと、また主がヨルダン川の川向う、つまり東側で、そのアモリ人の二人の王になさったすべてのこと、すなわち彼らを滅ぼし、その国を占領したということを知ったと語る。彼らはイスラエル人がヨルダン川を渡ったことやエリコやアイの町を滅ぼしたことには触れない。つまり、非常に遠い国から来たので最近のニュースは知らないというふりをするのである。なかなかの役者である。

[11-13] それで、そのような強く力ある神の民イスラエルと盟約を結ぶために自分たちの国の長老たちや住人たちは自分たちを送り出した。そして遠い旅だったので自分たちが出発したときに持って来たパンはこのように干からびて、ぼろぼろになってしまった。また、ぶどう酒を満たした新しい皮袋も破れ、上着も履き物もとても長い旅のために古びてしまったと、彼らの視覚に訴えて言った。

[14]「そこで人々は彼らの食料の一部を受け取った。しかし、主の指示を求めなかった」

彼らは実際に手に取って食べてみたりしたのであろう。これぐらい古くなっているということは、かなり遠くから来たに違いないと彼らは判断したのであろう。

ここで言われている「主の指示を求める」とは主に祈って導きを願うことで、一般的にはモーセの兄アロンから祭司の職を受け継いだ息子のエルアザルがウリムとトンミムというくじのようなものを用いて行うことになっていた。→出28:30、民27:21 しかし、イスラエル人はこの時、自分たちの判断を優先して主の指示を求めなかったのである。

[15-16] それでヨシュアは彼らと和を講じ、彼らを生かしておく盟約を結んだ。会衆の上に立つ族長たちも彼らに誓った。ところがそれから三日後にイスラエルの

人々は彼らが近くの者たちで、自分たちのただ中に住んでいるということを聞いたのである。

[17]「そこでイスラエルの子らは出発し、三日目に彼らの町々に着いた。彼らの町々とはギブオン、ケフィラ、ベエロテ、およびキルヤテ・エアリムであった」

そこは単にギブオンの町だけではなく、その近辺に位置する三つの町も含まれていた。その町々の住民は意思を統一して、運命共同体としてギブオンの人々をヨシュアのもとに送ったのであろう。

[18] こうしてギルガルのイスラエルの陣営へやってきた人々はカナンの地の住民であることがはっきりしたが、イスラエルの族長たちはすでに主にかけて彼らを生かしてやると誓っていたので、イスラエル人は彼らを討つことはしなかった。しかし、イスラエルの全会衆は族長たちに向かって不平を言ったのである。会衆はうまくいつている時は指導者に従うが、少しでも不満があるとすぐに不平を言うのである。

[19-21] しかし、ここに「誓い」ということが大きな意味を持つてくる。「族長たちはみな全会衆に言った。『私たちはイスラエルの神、主にかけて誓った。だから今、私たちは彼らに触れることはできない。私たちは彼らにこうしよう。彼らを生かしておこう。そうすれば、私たちが彼らに誓った誓いのために、御怒りが私たちの上を下ることはないだろう。』族長たちは全会衆に言った。『彼らを生かしておこう。』彼らは全会衆のために薪を割る者、水を汲む者となった。族長たちが彼らについて言ったとおりである」

主にかけて誓ったことは必ず守り通さなければならない。事情が変わったからとか、そんな気持ちにならないとか、相手に問題があるからとかで勝手に破ってはならないのである。もとはと言えばイスラエル人が主のみこころをうかがうことをせず、自分たちの判断を優先したことに端を発するのであるが、もう主にかけて誓ってしまったので取り消すことができないのである。

創世記27章でイスラエルの先祖アブラハムの子イサクは年をとって目がよく見えなくなって来た時、自分の長男エサウを祝福しようとした。この祝福には後継者としての特権が含まれている。狩りに行って獲物をしとめ、それでおいしい料理を作って持って来なさいと言った。イサクはその料理を食べてエサウを祝福しようとした。しかし弟のヤコブが毛深い兄の姿に変装して兄になりすまし、母の作ったおいしい料理を持って行って、目の見えない父から本来兄のエサウが受けるべき祝福を横取りしてしまったのであった。狩りから帰って来たエサウは父のところへおいしい料理を作って持って行ったが、弟がすでに父から祝福を受けたことを知って、激しく泣き叫び、自分に対しての祝福も願ったが、それはかなわなかった。弟ヤコブがだましたということで、それは無効にならなかったのである。だまされたからそれは契約解除すればよいということにはならないのである。現代の私たちから見るとそれは不思議で割り切れない思いを持つかもしれないが、イサクの祝福といい、ヨシュアと

族長たちの誓いといい、神の前でなされたことは、それほど大きく重い意味を持つことなのである。そして、そのような一見理不尽な出来事を通してなお主なる神の摂理の御手が働いていくのを私たちは見るのである。

[22-25] ヨシュアはギブオン町の住民を呼び寄せて「あなたがたは私たちの中のただ中に住んでいながら、なぜ、……私たちに欺いたのか」といって責めたが、それに対して彼らは24節にあるように「しもべどもは、はっきり知らされました。あなたの神、主がこの全土をあなたがたに与え、その地の全住民をあなたがたの前から根絶やしにするように、しもべモーセにお命じになったことを、それで私たちは、自分のいのちのことであなたがたを非常に恐れ、このようなことをしたのです」と答えた。これは自分たちのいのち惜しさにイスラエル側についた。ただそれだけの理由であるように思えるが、しかし、ここにはあのエリコの住民であった遊女ラハブが言ったことばとよく似ており、イスラエルの神こそ真の神であり、自分たちの信じていた偶像の神々には力がなく空しいということに気がついたゆえの行動であったのではないか。ここに彼らのイスラエルの神に対する信仰を持った者として姿を見る。彼らの信仰による行動は彼らにいのちを与え、救いをもたらすこととなったのである。ヨシュアは彼らに「今、あなたがたはのろわれる。あなたがたの中から、奴隷たち、私の神の家のために薪を割る者と水を汲む者が絶えることはない」(23)と言い渡すが、それに対して彼らは「ご覧ください。今、私たちはあなたの手の中にあります。あなたのお気に召すように、お目にかなうように私たちが扱ってください」(25)との従順なことばで答える。

ここにはイスラエルの中にもぐり込んで偶像礼拝や不道徳で悪い影響を与えてやろうというような思いはみじんも見られない。彼らはイスラエルの神、主に心から従おうとしているのである。

[26-27]「ヨシュアは彼らが言うようにし、彼らをイスラエルの子らの手から救った。それで彼らは殺されなかった。ヨシュアはその日、彼らを会衆のため、また主の祭壇のため、主が選ばれる場所で薪を割る者と水を汲む者とし、今日に至っている」

このギブオンの人たちは、やがて後年、イスラエル民族に同化されていったと考えられる。→ネヘミヤ3:7, 7:25

私たちは旧約聖書において神の厳しさを見る。神の民イスラエルを保護し、偶像崇拜と不道徳やさまざまな罪の中にあるエジプト人やカナン地の住人、異邦人たちを徹底的にさばかれる姿を見るが、しかし、なおそのような中であっても信仰をもって主なる神に従おうとする人々には、主はあわれみをもって神の民の中に迎え入れられるということも事実であるということを知られる。神の義とともに神のあわれみも、旧約聖書においてちゃんと見られるのである。

マタイの福音書15:21節以下でイエスと弟子たちがイスラエルから出て、ツロとシドン(フェニキア)に行かれた時、その地方のカナン人の女がイエスに悪霊

につかれた娘を癒してくださるように願っているが、その時、イエスは「わたしはイスラエルの家の失われた羊たち以外のところには、遣わされてはいません」と答えられた。(24) それでもなおひれ伏して願う女に、イエスは「子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのは良くないことです」(26)と言われた。しかし彼女は「主よ。そのとおりです。ただ、小犬でも主人の食卓から落ちるパン屑はいただきます」(27)と、なおもあわれみを願った。するとイエスは彼女に「女の方、あなたの信仰は立派です。あなたが願うとおりになるように」(28)と答えられ、彼女の娘はすぐに癒されたのであった。

この時の主イエスの第一の目的はイスラエルの民の救い、イスラエルの民に福音を伝えることであったが、それでもなお主のもとに熱心に救いを求めてやって来る異邦人たちに対してもあわれみをもって答えておられることが分かる。異邦人であっても求めれば与えられ、たたけば開かれるのである。私たちがカナン人同様滅ぶべき者であったが、主のあわれみによって信仰を持つ者とされ、救いに入れられたのであった。

主なる神は信仰をもってご自身のところにやって来る人々に対して、あわれみと恵みをもって迎えられる。決して四角四面に突き放して、自業自得だと冷たい顔をしておられるお方ではない。

罪に損なわれているとはいえ、私たち人間にも人をあわれむ熱い心があるように、私たち人間を造られた全能の主なる神も、罪を赦さない義なる御性質とともに人に対するあわれみの御性質も豊かに持つておられるのである。そのような人間の救いのために神はそのひとり子イエス・キリストをこの世に送り、十字架において罪を贖ってくださったのであった。救いの道は今すべての人々に開かれているのである。そしてイスラエルのギブオンの人々に対する盟約のように神は必ずお約束を守られるお方なのである。

→エペソ2:1～5、8～9、19